

研究ノート

# ヘルマン・ロツツェとイマヌエル・カント

——図式と論理形式をめぐる——

浅野将秀

## 1 はじめに

本稿は、「論理形式 (logische Form)」と「図式 (Schema)」という二つの概念を軸に、ヘルマン・ロツツェとイマヌエル・カントという二人の哲学者のあいだの関係性を解明することを目的とした研究ノートである<sup>1</sup>。本稿はあくまで調査研究の報告であり、ロツツェとカントの関係性について何らか決定的な議論や主張をおこなうのではなく、この主題をめぐる今後の議論に必要となるとと思われる一次文献および先行研究の現状とその課題を整理することを第一の目的とする。なお、本稿以下では、ロツツェの論理学著作について、1843年に出版された *Logik* を「第一論理学」、その大幅な改訂として1874年に出版された *Logik: Drei Bücher* を「第二論理学」と呼ぶことにする。

よく知られるように、ロツツェの論理思想は新カント派をはじめ、現象学や初期分析哲学、プラグマティズムといった後に主流となる哲学全般に多大な影響を与えた<sup>2</sup>。とりわけ、Jeremy Heis らによる近年の研究を通じて、伝統的な概念論へのラディカルな批判を骨子とする彼の概念論は、『実体概念と関数概念』におけるエルンスト・カッシーラーの科学的概念形成の理論（いわゆる「関数概念 (Funktionsbegriff)」の理論）の核心部分に相当することが示されている<sup>3</sup>。さらに、浅野 (2020) は、このようなロツツェの概念論を情報科学や認知科学において現在採用されている概念や知識の表現様式と比較し、ロツツェの概念論が「概念空間 (conceptual space)」や「関係モデル (relational model)」といった理論的枠組みに匹敵する論理構造を備えていることを明らかにした。

このように後代への影響やその現代性が明らかとなっている一方で、ロツツェの論理思想がそれ自体いかなる哲学的伝統に由来するのかということについてはこれまであまり論じられることはなかったように思われる。この点について、ロツツェの生涯と思想を網羅的に扱った Beiser (2013) と Woodward (2015) は、ロツ

---

<sup>1</sup>本稿は、浅野将秀、五十嵐涼介、「カントとロツツェの抽象主義批判」(池田真治(編・著)『抽象と概念形成をめぐる哲学史——古代から近代まで——』、2021年に所収)の執筆者担当部分と、現在執筆中の拙論「図式と論理形式——第一論理学におけるロツツェのカント受容——」を増補改訂したものである。

<sup>2</sup>19世紀後半から20世紀初頭にかけての哲学界に対する影響力の大きさから、1880年から1920年にかけての期間は「ロツツェ時代」と呼ばれることもある(Willey, 1978, 57)。ヴィンデルバント、リッケルト、ラスクといった新カント派西南学派のいわゆる「価値哲学」に対する影響については、例えば(Heis, 2018)を参照。また、後に論理学革命をおこしたフレーゲへの影響をめぐることは、1980年代にHans SlugaとMichael Dummettのあいだで論争がなされている。ロツツェの後代への影響について数多くの論文を書いているNikolay Milkovは、ラッセルやムーアなどのケンブリッジの分析哲学や、『論理哲学論考』のウィトゲンシュタインやフッサールの哲学において鍵となる「事態 (Sachverhalt)」概念の背景にロツツェの論理学著作が存在することを指摘している(Milkov, 2000, 2002)。また、初期プラグマティズムに対するロツツェの影響を論じたものとしては、例えばHookway (2009)がある。

<sup>3</sup>Heis (2008, 2014); 浅野 (2020)。

ツェに対するカントの影響として、第一論理学の序論におけるカントの図式論をめぐる議論の存在を指摘する<sup>4</sup>。そこにおいてロツツェは、論理形式とはある意味でカントの図式概念を拡張ないし一般化したものに他ならないと主張する。しかし、Beiser らはこの事実を指摘するにとどまり、この主張の内実および評価についてほとんど考察を与えていない。

このような状況をふまえ、本稿ではロツツェの第一論理学における論理形式と図式をめぐるロツツェの議論とその周辺状況を整理し、ロツツェとカントの連続性の解明に向けた下地を用意することを目指す。ロツツェの論理思想に対するカントの図式論の影響を明らかにすることは、二つの点において論理哲学史研究に貢献すると考えられる。第一に、それは新カント派に対するロツツェの影響について再考を促すものであろう。というのも、Krijnen (2020) が論じるように、ヴィンデルバントやリッケルトら新カント派西南学派の哲学の背景にはカントの図式論の受容があったと考えられるからである。第二に、それはカントの論理思想の射程の解明にもつながるであろう。というのも、伝統論理学の枠組みから大きく離反しさまざまな点で現代性が認められるロツツェの論理思想の根底にカントの図式論が存在するのだとすれば、それはカントの論理思想それ自体の中に伝統的な枠組みを大きく超え出たより豊かな論理的構造や哲学的洞察が含まれるということの意味からである。この意味でロツツェのカントの連続性を明らかにすることはカントの哲学それ自体の解明にもまた一定の貢献をするとと言える。

本稿の構成は次の通りである。まず、第2節で、近年の主要な先行研究である Beiser (2013) と Woodward (2015) に即して19世紀中頃のドイツ論理学におけるロツツェの基本的な立場を概観する。続いて、第3節で、第一論理学序論における論理形式と図式に関するロツツェの見解の概要を紹介する。第4節では、前節で見たロツツェの見解について生じる解釈上の問題と、その解決に向けた基本の方針を示す。

第5節では、『純粹理性批判』のテキストに即して、図式に対するカント自身の説明を概観し、図式論の背景にあったカントの洞察について考察する。第6節では、第4節の考察に基づき、カントの図式論との比較対象としてロツツェの概念論における種類関係の取り扱いの骨子を確認する。第7節では、先行する二つの節で見たロツツェの概念論とカントの図式論に共通点と差異について考察し、第2節で見た図式と論理形式に関するロツツェの見解に対し解釈の指針を与える。

## 2 19世紀ドイツにおけるロツツェの位置

近年の主要なロツツェ研究である Beiser (2013) と Woodward (2015) はいずれもロツツェの第一論理学について当時のドイツの状況と関係づけながら論じている<sup>5</sup>。以下ではまず、これらの研究に依拠しながら、19世紀中頃のドイツ論理学の状況を整理し、ロツツェの第一論理学の基本的立場を見ることにしたい。

1840年代初頭、論理学という学問は、その形式的学問としての側面に関してはアリストテレスの時代からさほど変化していなかったが、カントにより超越論的論理学という領野が切り拓かれて以降、その基本的な地位や本性について再考を迫られていた。すなわち、論理学は形而上学的ないし認識論的な前提を必然的に含み、その意味でこれらの学問の一部とみなされるべきなのか、それとも、あくまで独立した学問であり、他の学問から独立に論じることができるのか。こうした論理学の根本問題に対し、当時の他の哲学者同様、ロツツェもまた第一論理学を著すにあたり自らの立場を示さねばならなかった。

論理学の本性をめぐる当時の論争の対立軸の一つは、一般論理学と超越論的論理学というカントの区別によ

---

<sup>4</sup>Beiser (2013, 183); Woodward (2015, 159).

<sup>5</sup>Beiser (2013, §3.5); Woodward (2015, chp. 6).

来する。認識の内容を捨象しもっぱら認識相互の形式的関係のみを考察する一般論理学は、J. F. ヘルバルトや M. W. ドロビッシュを通じて、論理学は純粋に形式的な学問であり判断形式および推論形式の研究に他ならないという主張を導いた。他方、認識の内容に関わり、認識に実在性ないし妥当性をもたらすことを目的とする超越論的論理学は、J. G. フィヒテやヘーゲルを通じて弁証法的論理学へと姿を変え、論理学は認識論的な要素を含まねばならないという結論を導いた。かくして、カントにより相補的な領域として導入された一般論理学／超越論的論理学という二つの論理学は論理学の本性に関する二つの立場として対置されることとなった<sup>6</sup>。

もう一つの対立軸は、論理法則や論理形式といった論理学の根本概念の探究に際して我々が採るべき手法に関わる。論理学の自律性を主張するヘルバルトは思考の活動と思考の内容は峻別されねばならないとし、ここから論理形式や論理法則の起源を探究すべきでない<sup>7</sup>と主張したが、ロツツェはこれに異を唱え、論理学の根本概念の起源に関する問いもまた論理学において正当に扱われねばならないとした<sup>8</sup>。

当時、論理形式や論理法則の本性や起源を探求する手法として二つのアプローチが存在した。一つは、論理法則や論理形式を人間の心の所産と考える心理主義的アプローチであり、もう一つはそれらを事物の存在論的形式とみなす形而上学的アプローチである。前者の代表者としては、例えば J. S. ミルなどの英国の哲学者を<sup>9</sup>、後者の代表者としてはヘーゲルを挙げることができる。

ロツツェによれば、これらのアプローチのいずれもが困難を抱えている。まず、心理主義的アプローチは悪循環を抱えている。というのも、論理法則や論理形式を何らかの心理的能力から導出することを試みる際に、我々は求めている当の法則や形式に依拠しているように思われるからである。また、このアプローチにおいて論理法則や論理形式は純粋に主観的なものとみなされるが、これは論理学の規範的地位を説明することを困難にする。実際、我々の心理的事実に基づいて与えられる説明は、我々がどのように思考するかを説明するものであり、どのように思考すべきであるかを我々に教えるものではない<sup>10</sup>。

他方、形而上学的アプローチもまた問題を抱えている。確かに、ヘーゲルのように論理形式と存在の構造を端的に同一視すれば、論理形式の客観的地位を確保することができるかもしれないが、その一方で、そのような同一視により論理学はいかにして自然についての知識の獲得に寄与するのかという問いに答えることが不可能となる。というのも、このような考えの下では、論理学の根本をなす論理法則や論理形式もまた自然の法則ないし形式に他ならず、それゆえこのような問いを提起することすら不可能になってしまうからである<sup>11</sup>。

かくして、論理学の根本原理を探究する際にロツツェは心理主義的でも形而上学的でもない、第三の道に進むことになる。Metaphisik (1841) の時と同様、彼が依り所としたのは倫理学であった。ロツツェが考えるところでは、我々は目的論的観点から論理学の基礎を確信することが可能である。我々は論理法則や論理形式を心理学的メカニズムや事物の存在論的形式のような何らか他の原理から導出することはできないかもしれないが、目的にとっての手段という観点から、すなわち、それらが知識の獲得という我々の目的の実現において確かに必要であるという事実を示すことによって、我々はそれらの必然性を確信することができる。この意味で、ロツツェにおいて、形而上学同様論理学もまたその端緒を倫理学にもつ<sup>11</sup>。

<sup>6</sup>Frank (1991, 247-8). Woodward (2015) は 19 世紀の論理学の状況について概ね Frank の論文に依拠している。

<sup>7</sup>Beiser (2013, 180); Lotze (1843, 3-7).

<sup>8</sup>Woodward (2015, 151) によれば、このような心理主義的アプローチとしてロツツェが誰を念頭に置いていたのかは明らかではないが、彼は少なくとも友人のアベルトの著作を通じて観念連合に基づく心理主義の教説をよく知っていたと推測される。

<sup>9</sup>Beiser (2013, 181); Lotze (1843, 8-9).

<sup>10</sup>Beiser (2013, 181); Lotze (1843, 10-12).

<sup>11</sup>Beiser (2013, 181-2); Lotze (1843, 7, 9, 14, 23). Beiser も指摘するように、ここでの「目的」がいかなる意味で「倫理的」であるのかはあまり明らかではない。ロツツェは論理学の目的は知識の獲得にあるとする一方、なぜそれがいかなる意味で倫理的なもの、すなわち「善」と結びつくのかを説明していない。

先で見たように論理学に対する心理主義的なアプローチを拒否する一方で、ロッツェは論理学における自発的な主観性の役割を強調する。これは心理主義的なアプローチと形而上学的なアプローチの両方に対する反論とみなすことができる。というのも、これらのアプローチは論理学から主観性を追放しようという点においては共通するからである<sup>12</sup>。

しかし、ここでロッツェが強調する主観性は心理主義のそれとは異なるという点に注意せねばならない。Woodward が指摘するように、ロッツェは論理法則や論理形式を心的な力と峻別される、目的論的探究により明らかとなる主観の作用の所産と考える<sup>13</sup>。また、Beiser によれば、このような主観性の側面を強調する際に彼が念頭に置いているのは判断や推論における表象の結合であり、彼はこれを「批判 (Kritik)」と呼ぶ。そして、主観によるこの批判作用は判断や推論によって結びつけられた表象が真とみなされるに値するかどうかを決定する、換言すれば、表象が精神の目的であるところの真理に寄与するかどうかを評価する、一種の価値づけの作用であるとロッツェは論じる。ロッツェが後にヴィンデルバント、リッケルト、ラスクラ新カント派西南学派によって展開された「価値哲学」の創始者と言われる所以の一つは、判断における価値的次元の存在を主張するこの点にある<sup>14</sup>。

また、これは同時に当時影響力のあったトレンドレンブルクに対する応答でもあった。1840年に初版が出版された *Logische Untersuchungen* においてトレンドレンブルクは形式主義に異を唱え、論理学は必然的に形而上学的な前提を伴うと主張した。それと同時に、彼はアリストテレス主義者としての立場から超越論的アプローチを拒否し、存在のカテゴリーを主観を欠く運動であるとした。これに対しロッツェは、*Metaphysik* (1841) においてトレンドレンブルクを「才気あふれる学者」として賞賛しながらも、超越論的論理学の立場を維持し、我々の思考における主観の役割の重要性を強調した<sup>15</sup>。

以上をまとめると、論理形式や論理法則の起源をめぐる探究において、ロッツェは元来のカント的な立場に立ち返ることによって、当時支配的だった心理主義的、形而上学の見解のいずれにも属さない独自の立場を保持したとすることができる。このことからロッツェの論理思想に対するカントの影響が強く示唆されるが、第一論理学にはロッツェは論理形式の本性をカントの図式論と関係づけて論じている箇所が存在する。以下では、ロッツェに対するカントの影響の内実を検討する上で重要と思われる、図式と論理形式をめぐるロッツェの考察を見ていくことにしたい。

### 3 「拡張された図式」としての論理形式

第1節でも述べたように、Beiser (2013) や Woodward (2015) はロッツェに対するカントの影響の証拠として第一論理学の序論において展開される論理形式と図式をめぐる考察の存在を指摘するが、彼らはその詳細についてほとんど議論を与えていない。したがって、本節ではまずロッツェのテキストに沿ってこの議論の概要を与えることから始めることにしたい。

第一論理学の序論において、ロッツェは論理形式に関するヘルバルトの見解に対する批判的考察に続けてカントの教説の検討へと向かう。そこで彼は感性と悟性の関係や表象の総合における統覚の役割といったカントの主要なテーゼを取り上げた後、最後に「我々の目的にとってとりわけ重要であり、形而上学的なものと対置される論理的なものの性格を明らかにする」(Lotze, 1843, 27) として、カントの純粹悟性概念の図式論につい

<sup>12</sup>Beiser (2013, 182); Lotze (1843, 20-1).

<sup>13</sup>Woodward (2015, 151); Lotze (1843, 9).

<sup>14</sup>Beiser (2013, 182-3); Lotze (1843, 16-7).

<sup>15</sup>Frank (1991, 248); Woodward (2015, 148-9); Lotze (1841, 326-7).

て解説を与える。

そこでのロツツェの解説はきわめて一般的なものである。最も抽象的な概念である純粹悟性概念（カテゴリー）は、それ自体具体的な感性的直観と直接に関係づけることはできず、何らかの媒介するものを必要とする。この媒介者こそ図式であり、それはカテゴリーと直観の両者を総合する規則の表象として理解される。そして、このような総合は直観の形式すなわち時間と空間に従う形で遂行される<sup>16</sup>。

ここでロツツェは、興味深いことに、カテゴリーの図式に関する以上の説明は直観形式に対する言及を取り除くことによって論理形式の本性に関する説明として理解することが可能であり<sup>17</sup>、この意味で論理形式とは「拡張された (ausgedehnt)」あるいは「弱められた (abgeschwächt)」図式<sup>18</sup>図式に他ならないと主張する。

[...] 実体の概念は時間における持続の図式を通じて初めて意味をもち、因果の概念は時間の経過を通じてはじめて意味をもち、そのいずれもが時間と空間を離れては空虚で適用不可能な思考となる、という点でカントは正しいかもしれない。しかし、事情をもつばら論理的な観点から見れば、思考は決して経験やカントの意味での実在的認識に限られるわけではない。明らかのように、我々はいかなる具体的な現象も対応することがない理念的なもの (Idee) を判断の諸形式において結合することが可能であり、このような思考の価値がどれほど少なかろうと、その端的な可能性は、我々がカテゴリーを [...] 表象の総合において時間と空間から独立に用いる、ということを示している。(Lotze, 1843, 28)

各々のカテゴリーがそれに従う内容に対して与える形式的要求は、一方で、現実において我々に与えられる現象の把握の仕方として、空間および時間という形式に明示的に言及することによって理解される。しかし、この要求を時間や空間から切り離して理解することもまた可能である。第一の場合、この要求はカント的な図式を与え、第二の場合、論理形式を与える。(Lotze, 1843, 29)

これらの引用からも見てとれるように、このような主張する際にロツツェは論理学と図式論の間に存在する関心の相違を念頭に置いている。図式論、とりわけ純粹悟性概念の図式論においてカントが問題としていたのは実在的認識におけるカテゴリー（概念）の客観的妥当性の条件、すなわち、悟性に由来しもつばら抽象的であるようなカテゴリーを、知覚を典型とするような具体的で直観的な経験的事象に適用することはいかにして可能か、ということであった。他方で、論理学、とりわけ純粹論理学の考察対象はそのような意味での認識に限定されるわけでない。すなわち、論理学の考察対象はあくまで我々の思考一般であり、そこにはいかなる具体的な現象にも対応することがない理念的なものに関する思考や判断もまた含まれる。このような理念的なものについて我々が思考し判断することができるという事実は、これらの思考や判断においてもまた我々は種々のカテゴリーに依拠し、それらに従って一連の表象を結合するということを意味している。しかし、結合される表象はあくまで理念的なものであり、直観に由来するものではない。ここから、理念的なものについての思考および判断の可能性を通じてカテゴリーおよびそれらの図式を我々の直観形式であるところの時間や空間から独立に用いる可能性が示唆される。そして、以上の考察の結論として、ロツツェはこのような仕方でカントの図式概念を拡張あるいは一般化するとそれは我々が「論理形式」という語のもとで理解しているものに他ならないと主張するに到る<sup>19</sup>。

<sup>16</sup>Lotze (1843, 27).

<sup>17</sup>Ibid.

<sup>18</sup>Lotze (1843, 28, 29)

<sup>19</sup>1912年版の第二論理学に対する序文を書いた George Misch は以上のロツツェの議論を次のようにまとめている。

[...] 図式論は経験の対象の構成に限定されているわけではなく、思想それ自体に関係するのであり、このようにして「確立された」思想の客観的意味は一切問題とならないという点において、論理形式は宇宙論的媒介 (kosmologischen Vermittlung) と

## 4 問題の所在と解決の指針

前節で見たように、ロツツェは論理形式をカントの図式の拡張であると理解し、その拡張は図式に関するカントの教説から直観形式としての時間および空間への言及を取り除くことによってなされると考える。しかし、「カテゴリーの図式から直観形式を切り離す」というアイディアはそれ自体大きな問題を抱えているように思われる。というのも、カントはカテゴリーの図式として機能し、カテゴリーと感性的直観を結びつける上で決定的な役割を果たすのは時間に他ならないとしているからである (A139/B178; A142/B182)。だとすると、図式から時間を切り離すというロツツェの主張はそれ自体カントの図式論の核心部分を捉え損ねており、それゆえそこにカントの図式論の影響を認めることは不合理であるように思われる。したがって、このような主張をする際にロツツェが何を言わんとしており、またそれはいかなる意味においてカントの図式論の拡張であると認められるべきであるのか、ということが明らかにされねばならない。そのためには、ひとまず図式に対するカント自身の考察に立ち返り、彼がこの概念を導入した動機から見直した上で、改めてこの主張の内実を検討することが得策であると考えられる。

さらに、論理形式に関するロツツェの見解が実際にカントの図式論の影響下にある、すなわち、両者の間により実質的な連続性が存在するというを示すためには、以上の点に加えて、ロツツェの論理学体系の内実に踏み込んだ上で、そこに論理形式は拡張された図式であるという洞察が反映されているということを示す必要があるだろう。しかしながら、この序論に続く概念論、判断論、推理論の中でロツツェがカントの図式論に直接言及することはなく、図式と論理形式に関する以上の考察が実のところ彼の論理学体系においてどのように働いているのかということとはほとんど明らかでない。ゆえに我々は彼の明示的な文言を参照することはできず、彼の論理学体系、とりわけ彼の概念論の含意を精査し、そこに以上の考察に相当する要素を見出すことを試みなければならない。そして、このような課題に取り組む上で、まずはこの脈絡において「論理形式」ということで何を考えるべきでなのかを明らかにし、ロツツェの論理学体系においてカントの図式論の比較対象となる部門を特定することが要求される。

一般に、「論理形式 (logische Form)」という語は論理学の考察対象となるものがもつ形式を広く指すのに用いられ、そこには少なくとも概念あるいは表象の形式、判断の形式、推論形式の三つが含まれる。カントにおいて、この語は主として判断の形式、すなわち、悟性による判断における名辞の結合の形式を意味する。よく知られるように、『純粋理性批判』においてカントは、判断表において示される判断の諸形式に関する考察を通じて我々の認識におけるカテゴリーの必然性 (普遍妥当性) を発見した。ロツツェはこのようなカントの功績を認めつつも、カントは「もっぱら総合の可能性にのみ注意を払っており、その結果判断形式にのみ注目する一方で、このような結合の境地 (Element) として存在せねばならないもの、すなわち表象と概念の形式に注意を払っていなかった」(Lotze, 1843, 26) と不満を述べる。このような言葉からは、判断の形式は結局のところそれらを構成する概念 (ないし表象) の形式に依存するのであり、その点において判断の論理形式の問題は概念の論理形式、すなわち概念や表象がもつ論理的構造の問題に帰着するとロツツェが考えていることを

---

区別される。そして、ここに相等性、類似性、差異、対当、矛盾、条件といった純粋に論理的な概念の起源がある。カテゴリーの内容を未規定のままにすることに加え、カテゴリーの形式、カント的に言えば抽象的な総合の規則を、完全に抽象的に、すなわち直観の形式に言及することなしにその適用へともたらし思考の無限定の本性を特徴づける、カテゴリーの「超越的使用」もまた論理形式の本質に属するのである。かくしてロツツェは、思考を存在の認識のための実用的技術であるというその根源的規定から解放し、その自存的な戯れ (selbständigen Spiel) において「実在の意味」を捨て去ることによって、純粋論理学に到達しているのである。(Misch, 1912, xxxviii)

見てとることができる。実際、カントは一般論理学において概念や表象の論理的構造について概ね伝統的な教説を踏襲し、概念をもっぱら徴標の集まりと同一視する一方で、後で見るように、ロッツェはこのような伝統的教説をその根本から批判し、概念の論理形式に対し新たな描像を提示する。

また、図式論においてカントが問題にしているのは基本的に概念と直観の関係、より具体的には、前者による後者の包摂という関係であったということも注意に値する。これが意味するのは、少なくとも図式論の脈絡においては、「論理形式」として第一には概念の形式が問題となる、ということである。しかし、ロッツェも指摘するように、カントの図式論において図式と論理形式の関係はまったく明らかではない (Lotze, 1843, 27)。

以上の事情をあわせて考えると、「論理形式とは拡張された図式である」というロッツェの主張を検討する上で第一に注目すべきであるのは、概念の論理形式に関する教説、すなわち彼の概念論であると考えられる。したがって以下では、第一論理学序文におけるロッツェの考察の内実とその意義を検討する予備的考察として、カントの元来の図式論、とりわけ純粋語性概念の図式論とロッツェの概念論それぞれの基本的な枠組みを概観することにした。

## 5 カントの図式論

よく知られるように、『純粋理性批判』においてカントは悟性と感性を峻別する。その結果、彼は本性上異種的な悟性に由来する概念（思想）と現象的な感覚的知覚に適用することを可能にする——別様に言えば、概念に意味ないし意義を付与する<sup>20</sup>——ものとして、両者を媒介する第三の契機を導入することになる。そして、この媒介者こそカントが「図式 (Schema)」と呼ぶところのものであり、彼は「原則の分析論」の図式論の章において各々の図式の働きを説明する。

カントの図式は、それらが用いられる概念の種類に応じて、(1) 経験的概念の図式、(2) 純粋な感性的概念の図式、(3) 純粋悟性概念 (カテゴリー) の図式の三種に大別される。とりわけ第三のものは「超越論的図式」と呼ばれる。以下ではこの区分に従って図式の機能を概観し、カントがこの概念を導入した背景にあった哲学的洞察がどのようなものであったのかについて考察する。

経験的概念は図式と直接に関係する。例えば、犬の概念は「わたくしの構想力がそれにしたがって一定の四足獣を一般的に示すことのできる規則を意味する」(A141/B180)。すなわち、我々は犬の概念を特定の感覚印象 (すなわち、犬の知覚経験) に適用するために、いったんこの概念から何らか犬にかんする漠然とした感性的なイメージ (「形像 (Bild)」) を作り出す必要があるが、この過程に含まれる、一定の (しかし一般的であるような) イメージの産出に用いられる規則が経験的概念の図式である。この意味で、経験的概念は「我々の直観を限定する規則としての構想力の図式に直接関与する」(ibid.) とカントは言う。

純粋な感性的概念、すなわち〈三角形〉のような幾何学的概念は、その起源において経験的概念のように特殊かつ個別的な知覚印象に基づいているわけではないが、それでもなおそれらの図式の働きにおいては経験的概念のそれとおおよそ共通する。すなわち、これらの概念の図式とは、我々がそれにしたがって純粋な一般的形像を心的に構成したり、実際に描くことを可能にする規則である。例えば、「三角形の概念に対応する図式をもつとは、『三角形』という語が当てはまる様々な事物を心に描くことができるということ」<sup>21</sup>である。カントはこのような図式を「アプリアリな純粋構想力の作り出すもので、それにしたがってはじめて形像が可能となるところの略図 (Monogram)」(A142/B181) であると言う。これが意味するのは、例えば〈三角形〉の

<sup>20</sup>A140/B179. Walsh (1957) も参照。

<sup>21</sup>The Encyclopedia of Philosophy, Volume 3, "Kant, Immanuel"

図式は、我々が（黒板や紙の上に）正三角形や直角三角形、鈍角三角形等々といった相異なるさまざまな三角形を描くことを可能にするような規則、すなわち三角形の作図法として機能する、ということである。

以上二種の図式に対し、超越論的図式は、「決して形像化されえない」（A142/B181）とカントは言う。しかし、それにもかかわらずこれらは図式としての資格を有する。というのも、これらもまた直観の多様を純粹悟性概念へと包摂することを可能にする、すなわち、「カテゴリーが表現する概念一般にしたがうところの統一の規則に合致した純粹総合」（ibid）として機能するからである。そして、カントよれば、この統一の規則は内官の形式としての時間により与えられる。「超越論的な時間規定は、悟性概念の図式として働き、現象をカテゴリーのもとに包摂する媒介の役目をするものなのである」（A139/B178）。かくして、各々の超越論的図式は時間に言及する形で導入されることになる。例えば、量のカテゴリーの（純粹）図式は、一から一へと（同種のものを）連続して加えることを包括する表象であるところの数であり、実体性の図式は実在的なもの時間における持続であるとカントは説明する<sup>22</sup>。

超越論的図式における時間への訴えはカントにおいて不可欠なものである。というのも、ここまでの引用からも見て取れるように、カントが考えるところでは図式は我々の構想力の所産であり、それゆえ内官の形式に従わねばならないからである<sup>23</sup>。また、超越論的図式としてもっぱら時間のみが採用され、同じく直観形式であるが、しかし外官の形式であるような空間が等閑になっているのはそのためである。しかしいずれにせよ、超越論的図式がもつ重要な働きは、直観の形式によって与えられる規則を通じて概念（カテゴリー）を感性的現象（直観）に適用することを可能にするという点にある。

以上の説明からも見て取れるように、カントにおいて図式がもつ第一の機能は概念と直観一般を結びつけるための規則を提供することにある。このことは形像を生み出すことのない超越論的図式もまた「図式」としての資格を与えられていることから十分に示唆される。すなわち、カントは、その本性においてもっぱら普遍的な概念により同じく本性上もっぱら個別性であるような直観を包摂することは決してトリヴィアルな過程ではなく、我々は何らかの規則による導きを必要とすると考え、そのような規則を与えるものとして図式という概念を導入したのである。これは、概念をいわば「薄められた経験」とし概念の経験への適用に一切の問題を見出さない英国経験論や、反対に、直観を含むあらゆるものを概念的なものとするライプニッツ＝ヴォルフ的な伝統のいずれとも異なる思考の展開である。そして、第一論理学序論において論理形式（先の考察をふまれば概念の形式）に関する自身の考察を展開する際にロツツェがカントの図式論に言及しているという事実は、彼が以上ようなカントの洞察を何らかの仕方で念頭に置いているということを示唆している。

## 6 ロツツェの概念論

本節では、第4節での考察にもとづいて、ロツツェの論理形式に関する見解として、彼の概念論、とりわけそこでの種類関係の取り扱いを見る。

Cassirer (1910) においてカッシーラーが書くように、ロツツェは伝統的な論理学の教説における基本的想定の一つかに対し仮借ない批判を与え、概念の構造やその形成のあり方について独自の見解を提示する<sup>24</sup>。ここで「伝統的な論理学の教説」と呼ばれているのは、アリストテレス以来の三段論法の理論の正当化のため

<sup>22</sup>A143/B182-3.

<sup>23</sup>A140/B180.

<sup>24</sup>Cassirer (1910, 27-9). 『実体概念と関数概念』でカッシーラーが引用しているのは、これまで主として見てきた第一論理学ではなく、後に自身の新たな哲学体系の第一部として1874年に出版した第二論理学である。第二論理学の概念論については、本稿冒頭でも言及した Heis らの研究によって詳細な内実とその射程が明らかにされてきている。



の意味論的構造として与えられる、主として英国経験論の伝統に根ざした概念構造や概念形成に関する一連の教説である。Heis は、カッシーラーの議論を踏襲した上で、このような伝統的見解を「『アリストテレス的』抽象主義モデル ('Aristotelian'-abstractionism model, 'A'-a model)」と呼ぶ (Heis, 2008, 92-3)。

以降では、ロツツェの論理学著作に即して彼の概念論の基本的な枠組みを見ていくが、Beiser も指摘するように<sup>25</sup>、用語法やその説明の洗練の度合いに関して若干の相違があるものの、骨子となる論点については第一論理学と第二論理学は概ね見解を同じくする。したがって以下では、主として第一論理学の概念論に即しつつも、説明がより明瞭になるような場合には適宜第二論理学の用語法や説明も援用することにした。

ロツツェの概念論において最も注目すべき特徴の一つは、彼の「抽象 (Abstraction)」の操作に関する教説である。伝統的な論理学の教説の下ではこの操作は比較される一連の特殊 (観念、表象、概念等々) に認められる差異を除去することでより普遍的な概念すなわち類概念を形成する操作として説明される。これに対しロツツェは、抽象の操作を比較される特殊の間に見出される差異をそれらを包摂するより高次の特徴に置き換える操作として理解する。彼が考えるところでは、例えば<金>、<銀>、<銅>といった一連の概念からそれらの類概念、すなわち<金属>なる概念を形成するためには、<黄色>や<白>、<赤>といった、個々の金属 (種) に固有な特徴 (徴標) を取り除くだけでなく、それと同時に、<何らかの色>のような、取り除いた当該箇所に、それらの徴標を包摂する高次の徴標、別様に言えば個別の規定を欠いた不定な徴標を新たに補填せねばならない<sup>26</sup>。

経験は我々に多くの現象において互いに相異なる徴標の類似した連関が存在することを教える。例えば、金や銅、銅について、金属という普遍概念はこれらの比較から形成され、物体という普遍概念はさらなる比較により形成される。しかし、〔それら普遍が〕 たんに各々の個別者の確定的な徴標を捨象することによって形成されることは決してない。そうではなく、〔それらは〕 これら取り去られた徴標の代わりに、それが要素となっているような普遍的領域の概念を措定することによって形成されるのである。(Lotze, 1843, 70)

しかし、十分に明らかなように、普遍は抽象の後に残される徴標の寄せ集めと考えることはできない。むしろ、普遍の真の内包は我々が取り除かれた徴標の場所に暗黙裏に据える置換 (Wiederersatz) に存するのである。(Lotze, 1843, 71)

金属において、金や銅がもつ色、重さ、硬さは、あたかもその普遍概念がいかなるこのような関係も欠くかのように、完全に捨象されるわけではない。そうではなく、金属とは一定の重さ、一定の輝き、一定の密度 (Cohärenz) をもつ物体である。そしてこれらの性質はいずれも、その詳細において不確定ではあるものの、にもかかわらず、そこにおいてそれらが金属という普遍概念に必然的に属しているような一定の領域の中に含まれているのである。(ibid.)

第二論理学において、以上の説明において現れる二種類の徴標——すなわち、抽象を通じて除去される、比較される特殊に固有な徴標と、この操作を通じて補填されるより高次で不確定な徴標——はそれぞれ「特殊徴標 (besondere Merkmal)」および「普遍徴標 (allgemeine Merkmal)」と呼ばれる<sup>27</sup>。これらの呼称を用いる

<sup>25</sup>Beiser (2013, 179, n. 63)

<sup>26</sup>Lotze (1843, 70-1, 74); Lotze (1874/1912, §23).

<sup>27</sup>上の引用からも見て取れるように、第一論理学において普遍徴標に相当するものは「徴標の普遍性 Allgemeinheit der Merkmal」や「普遍的領域 (allgemeinen Sphäre)」と呼ばれる。また、第一論理学には特殊徴標に相当する特定の呼称は存在しないようである。しかし、提示される見解自体は第二論理学のそれとほとんど相違は存在せず、ゆえに以下では説明を簡単にするために第二論理学での呼称

と、ロツツェにおける抽象の操作とは比較される一連の特殊に存在する特殊徴標を、それらを包摂する普遍徴標に置き換える操作である、とすることができる。

以上からも示唆されるように、ロツツェの概念論において、概念は一般にひとまとまりの普遍徴標から構成されるものとして理解される。例えば、〈金属〉は〈何らかの色〉〈何らかの重さ〉〈何らかの輝き〉といった一連の普遍徴標から構成され、〈動物〉は〈何らかの呼吸方法〉〈何らかの移動方法〉〈何らかの繁殖方法〉といった一連の普遍徴標から構成されるものとして理解される<sup>28</sup>。

抽象の操作と概念の一般的構造が与えられると、それらに基づいて概念の類種関係——上位概念と下位概念の論理的関係——が説明される。よく知られるように、抽象を徴標の端的な除去と考える伝統的な教説においては、概念の類種関係はもっぱら特定の徴標の除去ないし付加として規定される。例えば、〈人間〉はその類概念であるところの〈動物〉に、〈理性的〉という徴標を付加した結果であるとみなされ、〈動物〉はその下位（種）概念である〈人間〉から当該の徴標を取り除いた（つまり抽象した）結果とみなされる。

他方、抽象を特殊徴標の普遍徴標への置換と考えるロツツェにおいて、類種関係もまたこのような置換操作に基づいて説明される。すなわち、各々の種概念はそれが属するところの類概念を構成する各々の普遍徴標を、それらが包摂する特殊徴標のいずれかに置き換えた結果として与えられる。例えば、〈犬〉は、その類概念である〈動物〉に含まれる一連の普遍徴標——〈何らかの繁殖方法〉〈何らかの呼吸方法〉〈何らかの移動方法〉といった一連の不定な徴標——を、例えば〈何らかの繁殖方法〉を〈胎生〉に、〈何らかの呼吸方法〉を〈肺〉に、〈何らかの移動方法〉を〈歩行〉に置き換えた結果（すなわち、〈胎生、肺、歩行〉のような特殊徴標の組）として与えられる<sup>29</sup>。この例からも明らかのように、ロツツェの概念論において、類概念は種概念から一定の徴標を取り去ることで形成されるようなものではありえないし、同様に種概念は類概念に一定の徴標を付加した結果ではありえない。また各々の概念を構成する徴標の数を比べるとわかるように、抽象を通じて徴標の数が減ることはない。これが意味するのは、伝統的な教説の主要な帰結であるところの「内包と外延の反比例」はロツツェにおいてはもはや一般的原理として許容されないということである。

以上から次のことが帰結する。普遍概念は当の概念がそこから得られる特殊概念と同じだけ多くの徴標をもつ。(Lotze, 1843, 72)

真なる普遍についてはむしろこう言われるだろう。すなわち、その内包はつねにその種それ自体とちょうど同じだけ豊かであり、その徴標の総和はちょうど同じだけ多い。ただし、普遍的概念すなわち類はもっぱら未規定でいっそう普遍的な形で多くの徴標を含むのである。これらは種において定まった値ないし特殊な特徴づけにより表現され、最終的に単称概念においては、すべての未規定性が消え類がもつそれぞれの普遍的メルクマールは量や個別性、他のメルクマールとの関係において完全に定まった徴標へと置き換えられる。(Lotze, 1874/1912, §31)

ロツツェの概念論におけるもうひとつの重要な特徴は、概念の構造すなわち普遍徴標の連関の形式を強調しそこに概念の本性を見出す点にある。伝統的な教説において、概念を構成する一連の徴標はもっぱら連言的に結合されると前提される。例えば、〈人間〉は〈理性的〉かつ〈動物〉なるものとみなされる。これに対しロツツェは真なる類概念——すなわち、瑣末な言葉遊びではないような、そこに属するものの形成の根拠を説

を用いることにする。

<sup>28</sup>Lotze (1843, 71); Lotze (1874/1912, §23).

<sup>29</sup>Lotze (1874/1912, §31).

明するような概念<sup>30</sup>——においては、それを構成する（普遍）徴標は決して並列的にすなわち没構造的に配置されているだけでなく、それらは相互規定ないし相互依存の關係に立ちそれにより全体を形作るものでなければならぬ<sup>31</sup>。そして概念におけるこのような徴標の連関形式はそれに下屬する一連の種概念の徴標のあり方を支配し統御するものとして理解される<sup>32</sup>。

表象の論理形式は徴標の多様をそれらが共屬する（*zusammengehören*）全体へと還元する。しかし、この共屬性を正当化するものは何であるのか。見てきたように、雑多な諸部分から生じるのは、全体と區別される、根拠を欠く重要でない総和（*haltlose, gleichgiltige Summe*）以外の何物でもない。それゆえ、全体は、諸部分を相互に規定する支配的形式、それら相互規定の形式としてその部分に先立たねばならない。このような事前に規定する形式（*vorbestimmende Form*）は徴標の組み合わせの中に隠されており、これは徴標それ自体によっては語られえない。（*Lotze, 1843, 67*）

[...] 配列された徴標を与える表象がこのような結合の形式へと連れ戻されてはじめて [...] 表象は概念となる。（*Lotze, 1843, 70*）

実際、下屬は動物の概念とポリプ〔イソギンチャクなどの類〕の概念の間で生じる。なぜなら、前者は普遍的な形式規定をを与え、後者のすべての徴標はその結合に従わねばならないからである。（*Lotze, 1843, 79*）

そして先で見た類種關係に関する見解と併せて考えると、このように理解される概念における徴標の連関形式はつまるところ種概念における特殊徴標のあり方やその組み合わせに対する制約と考えることができる。例えば、三角形の概念に認められる普遍徴標の連関形式は直角正三角形や等角不等辺三角形のような一定の大きさの辺と角の組み合わせを不可能なものとして排除する規則に相当する<sup>33</sup>。

かくしてロッツェの概念論においては、類概念は種概念の形成に対する規則ないし制約として働くと考えられる。そして、この点を踏まえると、先で見た概念の類種關係もまた、普遍徴標と特殊徴標のあいだの単純で自由な置換ではなく、類概念により与えられる規則ないし制約に従った置換と捉え直される。このことから、ロッツェの概念論における類種關係は、徴標の単純な包摂關係として了解される伝統的な教説における類種關係よりもより複雑で自明でない論理的操作となっており、その内実（類概念により規定される）規則の遂行として理解されるということが明らかとなる。

## 7 図式論と概念論：共通点と差異

ここまで、論理形式とはカントの超越論的図式から直観形式として時間および空間を切り離したものであり、この意味で拡張された図式に他ならないという第一論理学序論におけるロッツェの考察の内実を明らか

<sup>30</sup>Lotze (1874/1912, §31); Cassirer (1910, 8).

<sup>31</sup>Lotze (1874/1912, §28). 第二論理学においてロッツェは概念における徴標の相互規定・相互依存の關係を「関数」と表現し  $S = F(a, b, c, \dots)$  のような関数的表記を用いる。ここから Heis はロッツェの概念論をしばしば「概念の関数モデル」と呼ぶ (Heis, 2008, 101, 283)。ただしここで「関数」ということで意味されているのはフレーゲが概念を関数と呼ぶ時に考えられているものとは大きく異なるという点には注意が必要である（この点については (Heis, 2008, A. 9) を参照）。また、第一論理学の概念論においてロッツェはこのような概念構造を「関数」と称することはしないようである。しかし、続く推理論の中で「代入による推論 (Schluß durch Substitution)」の論理構造を定式化する際に、関数的表記を用い小前提を中項の「関数」とする (Lotze (1843: 195))。このことは概念構造をその構成要素の関数とみなすアイディアがすでに第一論理学にあった可能性を示唆している Lotze (1843, 195)。

<sup>32</sup>Lotze (1874/1912, §29).

<sup>33</sup>Lotze (1874/1912, §126).

にする予備的考察として、カントの図式論とロッツェの概念論の骨子を見てきた。

第5節で見たように、カントは感性に由来する直観を悟性に由来する概念により包摂するためには各々の概念の図式として与えられる規則による導きが必要であると考えた。これが意味するのは、カントにおいて、概念の直観への適用は何らかのトリヴィアルでない規則の遂行の結果であるということである。図式により与えられる規則の実態は概念の種類に応じてさまざまでありうる。経験的概念や純粋な感性的概念の場合、それらは一定の形像を産出するための手続きとして与えられ、その一方で、超越論的図式においてそれらは時間という内官の形式に言及する形で与えられる。

他方、第6節で見たように、ロッツェは概念の類種関係を類概念に含まれる普遍徴標と種概念に含まれる特殊徴標のあいだの置換操作により規定する。そして、この置換操作は類概念の論理形式、すなわち、それらを構成する普遍徴標の連関の形式による制約に従う形で遂行される。この意味で、ロッツェの概念論において、類概念とそれに下屬する種概念のあいだには規則が介在し、種概念をその類概念に下屬させるプロセスはどのような規則の遂行として特徴づけられる。

かくして、カント図式論とロッツェの概念論の共通点が見出される。すなわち、カントとロッツェは、普遍の特殊への適用を自明なプロセスとみなさず、両者を媒介する規則の必要性を訴えるという点で共通する。この意味で、両者のあいだには<普遍と特殊を媒介する規則>という共通の思想モチーフが認められる。

もちろん、両者のあいだには差異も存在する。ロッツェが指摘するように、図式論においてカントが問題としていたのはもっぱら知覚を典型とするような実在的認識ないし経験の場面であった。すなわち、カントにおいて「特殊」として想定されているのは、もっぱら我々の感性に由来し現実に根をもつ直観である。これが意味するのは、カントにおいて規則による媒介が必要となるのは概念の直観への適用という場面のみであり、例えば<動物>と<犬>のあいだに見出されるような、概念相互のあいだの論理的関係についてはこのような規則は要求されない、ということである。それに対し、ロッツェが問題としているのはこのような概念の類種関係であり、「普遍」と「特殊」として彼が念頭に置いているのはいずれも概念である。

以上の比較を通じて見えてくるのは、<普遍を媒介する規則>というモチーフが適用される範囲を知覚のような経験的認識から概念系の構成に必要となる一般的な論理的原理へと移す過程においてロッツェとカントの間の相違が生じている、ということである。そしてここに論理形式とはカントの図式から直観形式を切り離したものに他ならないというロッツェの考察に対する解釈の指針が見出される。すなわち、ロッツェはカントの図式論における普遍と特殊を結びつけるためには規則による媒介が必要であるという洞察を評価し、その洞察を概念の類種関係という論理学の根本原理に反映させることを試みたが、その過程において、感性的直観はその考察の対象から外れ、その結果カントにおいて不可欠であった時間への言及は不要なものとなったために、図式から時間を切り離すということを思いついたのである。しかし、注意すべきは、何が規則としての役割を担うのかという点で見解の相違が認められるとしても、普遍と特殊を媒介する規則の必要性を訴えるということそれ自体はカントの図式論からロッツェの概念論に確かに受け継がれている、ということである。この意味で、ロッツェの概念論は確かにカントの図式論の延長線上にあると言えよう。そして、先の論理形式とは拡張された図式であるというロッツェの主張は以上のような描像の下で評価されるべきであると考えられる。このような解釈の妥当性の詳細な検討については今後の課題としたい。

## 参考文献

- Beiser, Frederick C. (2013) *Late German Idealism: Trendelenburg and Lotze*: Oxford University Press.  
Cassirer, Ernst (1910) *Substanzbegriff und Funktionsbegriff: Untersuchungen über die Grundfragen der Erkenntnistheorie*: Springer.

- ntniskritik*: Bruno Cassirer.
- Frank, Hartwig (1991) "Reform Efforts of Logic at Mid-nineteenth Century in Germany," in Woodward, William R. and Robert S. Cohen eds. *World Views and Scientific Discipline Formation*, pp. 247–258: Kluwer Academic Publishers.
- Heis, Jeremy (2008) "The Fact of Modern Mathematics: Geometry, Logic, and Concept Formation in Kant and Cassirer," Ph.D. dissertation, University of Pittsburgh, (Defense Date: 5 Sept 2007).
- (2014) "Ernst Cassirer's *Substanzbegriff und Funktionsbegriff*," *HOPOS: The Journal of the International Society for the History of Philosophy of Science*, Vol. 4, No. 2, pp. 241–270.
- (2018) "Neo-Kantianism," in Zalta, Edward N. ed. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, summer 2018 edition: Metaphysics Research Lab, Stanford University.
- Hookway, Christopher (2009) "Lotze and the Classical Pragmatists," *European Journal of Pragmatism and American Philosophy*, Vol. 1, No. I-1/2.
- Kant, Immanuel (1787/1998) *Kritik der reinen Vernunft*: Felix: Meiner.
- Krijnen, Christian (2020) "The Problem of Schematism in Kant and its Transformation in Southwest Neo-Kantianism," *Kant Yearbook*, Vol. 12, No. 1, pp. 81–114.
- Lotze, Hermann (1841) *Metaphysik*: Leipzig: Weidmann.
- (1843) *Logik*: Leipzig: Weidmann.
- (1874/1912) *Logik: Drei Bücher, vom Denken, vom Untersuchen und vom Erkennen.*: Leipzig: Meiner.
- Milkov, Nikolay (2000) "Lotze and the Early Cambridge Analytic Philosophy," *Prima Philosophia*, Vol. 13, pp. 133–53.
- (2002) "Lotze's Concept of 'States of Affairs' and its Critics," *Prima Philosophia*, Vol. 15, pp. 437–450.
- Misch, George (1912) "Einleitung," in *Logik: Drei Bücher, vom Denken, vom Untersuchen und von Erkennen*, pp. ix–xcii: Leipzig: Meiner.
- Walsh, W. H. (1957) "Schematism," *Kant-Studien*, Vol. 49, No. 1-4, pp. 95–106.
- Willey, Thomas E. (1978) *Back to Kant: The Revival of Kantianism in German Social and Historical Thought, 1860-1914*: Wayne State University Press.
- Woodward, William R. (2015) *Hermann Lotze: An Intellectual Biography*: Cambridge University Press.
- イマヌエル・カント (1970) 『世界の大思想 10 カント 〈上〉「純粹理性批判」』, 河出書房新社, (高峰一愚訳).
- エルンスト・カッシーラー (1979) 『実体概念と関数概念 認識批判の基本的諸問題の研究』, みすず書房, (山本義隆訳).
- 浅野将秀 (2020) 「『論理学』(1874)におけるロツツェの概念論」, 『哲学誌』, 第 62 号, 103–128 頁.